

徳田一穂と徳田秋聲

——父子作家の文学的闘争と交響——

大木 志門

- 1 はじめに
- 2 父子作家としての秋聲・一穂
- 3 『仮装人物』『順子もの』の周囲
- 4 書くこと／書かれることの葛藤
- 5 都市・東京の裏面を描く文学
- 6 戦後の中間小説と私小説
- 7 おわりに

1 はじめに

あらためて言うまでもなく、「書くこと」は一面において「権力」の行使という性格を持ち得る。文学について言えば、特に実際の出来事を扱い実在のモデルを用いて書くタイプの小説の場合、書くこと―書かれること―によって当事者間で直接的に権力関係が働く。たとえば書く側の主観によって切り取られた事件・人物は文字上の事実として流通し、書かれた側のイメージとして後世に残ってゆくことになる。書いた／書かれた側がこの世から存在しなくなっても、いや存在しなくなればこそなおさら、そのイメージ（良い悪いを問わず）の払拭は難しくなり、その姿が定着してゆくことになるのだ。

一般にも知られているところでは、島崎藤村「新生」に描かれた姪の駒子や川端康成作品における伊藤初代、志賀直哉の作品に描かれる父・直温、

島尾敏雄「死の棘」の妻ミホなどいくらでも挙げられる。書かれる側もまた作家であったとして、たとえば田山花袋と岡田(永代)美知代、岩野泡鳴と岩野(遠藤)清子、徳田秋聲と山田順子、田村松魚と田村俊子など、書かれた側が書き返したとしても、後世に名前が残った側の言説だけが定着してゆく。この中で田村俊子の場合は例外的だが、多くは男性作家の残したイメージが流通し、女性の側は作家であること自体が忘れられ、モデルとしての妻や愛人像に存在が切り詰められてしまう。

近年の研究ではそのような存在の復権が進みつつあり、岩野清子については尾形明子『自らを欺かず 泡鳴と清子の愛』(2001年 ちくま書房)が刊行され、岡田美知代については有元伸子によって複数の論考が刊行されている他、HP「広島的女性作家 岡田(永代)美知代」¹⁾で情報が更新されている。梯久美子『狂うひと「死の棘」の妻・島尾ミホ』(2016年 新潮社)が話題になったことも記憶に新しいであろう。また永淵朋枝『無名作家から見る日本近代文学 島崎藤村と『処女地』の女性達』(2020年 和泉書院)は、必ずしも直接的に書かれた側ではないが、同様に男性作家の影に隠れた「書く」女性達の姿を明らかにしようとした試みであるだろう。本稿の筆者も徳田秋聲の恋愛事件の相手で『仮装人物』他のモデルである山田順子についていくつかの論文を発表し『徳田秋聲の昭和 更新される自然主義』(2016年 立教大学出版会)に収録したほか、その代表作を『下萌ゆる草・オレンジエート 山田順子作品集』(2012年 龜鳴屋)として刊行したことがある。

以上は男女間の問題であるが、では親子間ではどうだろうか。幸田露伴と幸田文や森鷗外と森茉莉など子の側も書き手として有名になった場合や、一般人である子供が親の回想記を書く例は多い。これらの場合は恋愛・夫婦関係のような書き合うことの闘争関係になることは少ないだろうが、ある種の存在の切り下げが行われる場合はある。つまり、あくまでも作家

1) <https://home.hiroshima-u.ac.jp/okadamichiy/>

の遺族が書いた「資料」としてのみ残り、その存在もまた主体的な「書く」存在であったことが忘却される場合があるのだ。

その一つのケースとして、本稿では徳田秋聲の長男で作家である徳田一穂を取り上げる。もちろん、その存在が知られなくなったのは作品が同時代に充分評価されなかったからであり、仮に作家・徳田一穂が再発見されたとして、一部の文学愛好者以外に多数の読者が付くわけではないだろう。しかし、少なくとも彼がどのような作家で、戦前の文壇でどのような役割を果たしたかはもっと知られても良いのではないか。特に父・秋聲とともに昭和初年代から活躍し、戦争の時代に埋もれていった芸術派の作家として完全に忘却されるのは惜しい存在ではあるのだ。

また一穂の作品には数多く秋聲の姿が登場するにもかかわらず、これまで野口富士男をはじめとする秋聲研究でほぼ参照されることはなかった²⁾。それは一穂の単行本がほとんど残っておらず（ゆえに古書市場でもいくつかは稀覯本となっている）、著作リストも存在しなかったため参照しようがなかったということではあるだろう。ただし、のちに決別はしたが一時かなり親しく交流し、一穂の本を読んでいたことも間違いない野口が参照しなかったことに疑問は残るのだが。

近年筆者は、徳田一穂の著作リストを作成して文献を蒐集するとともに、その作品の一部を収録した二冊の編著『秋聲の家 徳田一穂作品集』（2020年 徳田秋聲記念館文庫）および『街の子の風貌 徳田一穂 小説と随想』（2021年 亀鳴屋）を刊行した。ただし、これらはエッセンスに過ぎず、解説でもかなりの数が残る作品のほとんどに言及できていない。本稿では、これまで研究対象となつてこなかった徳田一穂の作家的存在、特に戦前の文壇的位置づけを明確にするとともに、彼の文学の独自性および秋聲文学との関係性—それは先回りして述べれば闘争でもあり共鳴でもある—を明らか

2) 野口は一穂のいくつかの回想類や証言は参照しているが、小説は一部のタイトルに言及しているだけである。

にすることを目的とする。なお、論述の必要から伝記的事項や一部の作品の梗概や背景など事実に関わる部分については、前記の二冊の解説と部分的に重複することをお断りしておく。

2 父子作家としての秋聲・一穂

徳田一穂は1903（明治36）年生れ、1981（昭和56）年7月2日歿。出生届の記載は1904年3月20日だが、野口富士男『徳田秋聲傳』（1965年 筑摩書房）の調査により、前年7月に誕生したと推定されている。戸籍と実際の生誕日が異なるのは宮沢賢治の例などで知られるとおり戦前にはしばしばあることだが、一穂の場合は事実婚状態にあった小沢はまとの入籍後に秋聲がようやく認知したことによる。

一穂が誕生したのは秋聲が1902年より住んだ伝通院裏手の小石川表町（現文京区小石川）108番地の借家だった。金沢時代の旧友である田中千里の建てた借家に太田四郎³⁾の紹介で入ったもので、秋聲は当初、富山出身で同門の三島霜川と同居していたが、やがて手伝いに来たはまと恋愛関係に入り、居づらくなった霜川は出て行くことになった。その後、いくつかの借家を経て秋聲は1906年4月末に家族とともに現在も東京都の史蹟として残る本郷森川町1番地（現文京区本郷6丁目）の家に移り、残りの人生を一度も転居せず送ったので、一穂も生涯のほとんどを同地で暮らしたことになる。

一穂が少年期に通ったのは本郷の誠之小学校であり、神田区裏猿楽町にあった明治大学明治中学校に進学、1921年に金沢の第四高等学校の受験失敗後に、1924年に慶応大学文学部に入ったものの勉学に身が入らず、1928年頃に退学して文筆の道に入る。一穂、襄二、瑞子（夭逝）、喜代子（のち横光利一門下の作家・寺崎浩の妻）、三作（夭逝）、雅彦（のち文藝春秋社員）、

3) 彼らはいずれも帝大生で金沢の病院長の子弟であった。

百子という秋聲の七人の子供たちの中で、一人だけ父と同じ小説家の道を選択し、ともに書くことの苦楽を味わったのが一穂であった。一穂自身が兄弟の中で最も父と気質が似ていたと言うように、特に秋聲が1926年1月の妻の没後に三十歳年下の女弟子・山田順子との間に出来した恋愛事件、いわゆる「順子事件」では家族の中で唯一父の擁護にまわり、以後は「友達のような間柄の父と子」（『秋聲の家』1955年12月「随筆」）として「一つ屋根の下に、四十年間一緒に生活しながら、文学をやって」（『思出の一齣』1947年3月「プロメテ」）過ごしたのである。小石川表町や森川町の家は秋聲の『徴』（1911年「東京朝日新聞」連載）の舞台であり、同作には一穂から見れば父母の出会いから自身の出生にまつわるいざごぞを経て幼少期まで描かれている。また私小説作家である秋聲の以後の作品の多くに、家族たちとともに一穂の姿が描かれている。つまり、生まれる以前から父親が死を迎えるまで、その作中に描かれ尽くされた生涯だったのである。

ただし、秋聲に描かれ続けた一穂は、自身もまた作家となることで秋聲の存在を作家の眼で捉え返し、描き返した存在でもあった。現在判明している限り最も早く活字化されたのは1927年9月「新潮」に発表された随筆「父秋聲と自分」（のち『受難の芸術』（1941年9月 報國社）収録時に「父と自分」と改題）である。秋聲「別れ」（1928年1月「改造」）には「長男に又芸術的傾向のあるのに失望した揚句、為方なしに其れを容認した」とあるので、これ以前に作家志望を固めていたようだ。なお同作には病気で高等学校に入るのが3年遅れ、大学には1年ほどしか真面目に通わなかったとある。のち、中村武羅夫に薦められて1931年1月「新潮」に「人間生活の覚書」を書き、小説としてのデビュー作となった。この時期の一穂の作品は翻訳文学の影響が濃厚な詩的で硬質な文体で構成されており、「幻想の雪一室内楽風にした人生」（1931年9月「新潮」）、「夜の庭」（1933年11月「行動」）など題名からしてモダニズム文学風である。父子作家として昭和文壇に登場しながら、最新の海外文学や、佐藤春夫や横光利一ら同時代作家に親しんでおり「父親の自然主義に反抗気分」（「出発はこれから」1949年3月「東北文

学）」があった一穂は、秋聲文学と意図的に距離を取ろうとしていたのである。

ただし、そのモダニズム文学時代の作品にも実体験が背景にあったが、「地に足がついた感じで、現実感が作品の中に流れ出してきた」（同前）という短篇「年賀状」（1934年4月「行動」）あたりからリアリズムへの傾向を強めてゆく。詳しくは第5節で述べるが、玉の井の私娼を救出した事件を扱った「縛られた女」の連作を1936年より断続的に発表し、これらが一穂の前期の代表作となった。秋聲と親しい小栗風葉門下の中村武羅夫（号・泣花）や友人の橋崎勤がいた「新潮」や、田辺茂一の紀伊國屋出版部が発行した「行動」周辺で活動し、のち1939年には尾崎士郎、伊藤整、野口富士男らの「文学者」に参加した一穂の文壇的位置づけは、いわゆる「新興芸術派」傍流の作家と捉えられる。そして初期の心理主義的傾向から新社会派的傾向へと移行していった。一穂の著作リストを作成してわかったことは、小説にエッセイ等も加えると生涯に300以上の作品を遺していたことで、戦前に五冊の創作集と一冊の随筆集を刊行しているが、特に昭和10年代に活躍していた。大戦末期も厳しくなる統制の中で1942年までは積極的な執筆活動を継続していたのだ。

翌1943年に父・秋聲を亡くした後は、敗戦をまたいで再起をかけ精力的に創作に取り組んでいた時代もあったが、一穂の小説家としてのキャリアは「碑と未亡人」（1954年11月「新潮」）で一区切りつき、以後は秋聲の全集や単行本等の編纂や秋聲の思い出を中心に文壇回想や様々な随筆を執筆するようになり、そのまま父と同じ森川町の家で生涯を終えた。山の手文京区で生まれ育った一穂は自他共に認める都会っ子であり、父に頼んでまだ当時は珍しかった蓄音器を家庭に導入し、青年期よりレコードの試聴会やコンサートにも頻繁に出かけ、父とともに映画館やダンスホールにも出入りしていた。これらの嗜好がふんだんに生かされたのが一穂の文学である。また戦前から音楽や映画についての文章を発表していたが、戦後は街歩きに写真の趣味が加わり、自身の故郷である変わりゆく東京の街につい

ての文章を数多く残している。その集大成が遺作ともなった「日本古書通信」(1978年10月～1981年5月)連載の「森川町界限」(のち『秋聲と東京回顧—森川町界限』2008年 日本古書通信社)である。

ところで、1926年に長く生涯を共にしてきた妻・はまを喪った秋聲を慰めるために知友によって結成されたのが「二日会」である。これは元々友誼的な親睦団体にすぎなかったが、やがて1932年にそこに集まる若手作家を中心に「秋聲会」(のち「あらくれ会」)が結成され、機関誌「あらくれ」の刊行が始まる。この会はゆるやかな関係性であるが老若の多くの作家たちが集まり、また「あらくれ」には時評、座談会なども掲載され文壇では一つの派閥になっていた。特に軸となったのが芸術派の若手作家達であり、「文学界」に近い尾崎士郎や、舟橋聖一・阿部知二ら田辺茂一と親しい「行動」系の作家たちが参加しており、同誌を発行していた紀伊國屋出版部から「あらくれ」が発行されていた時代もあった。

一穂はその編集を担当した「あらくれ」⁴⁾を中心に「行動」「新潮」「文芸」など各誌に寄稿するようになるが、それには「二日会」「秋聲会」(「あらくれ会」)に集まる先輩作家や同世代作家達との交流が大きな刺激となり、また人脈作りにも役立ったことであろう。秋聲の側から見ても、新世代の作家達との交流は老作家に活力をもたらし、秋聲は昭和初年代の長い不振から「町の踊り場」(1933年3月「経済往来」)で脱し、「仮装人物」(1935年～1938年「経済往来」「日本評論」連載)で新境地を開くことになる。この「仮装人物」はそれまでのリアリズムとは異なるモダニズム文学風の装いであることが知られているが、この時代の秋聲は実際にジッドやブルーストやジョイスなどに盛んに言及しており⁵⁾、後続世代の作家達が影響を受けた欧米の新文学に感化されて「仮装」の自己という実存的テーマを持った異色長篇を書き上げたのである。そして、その際に直接的に同時代文化の受

4) 紀伊國屋出版部の手を離れてからは女性会員中心の編集体制となった。

5) このあたりの詳細は拙著『徳田秋聲の昭和 更新される自然主義』(前掲)の第2章をご参照いただきたい。

容の媒体となったのが長男で作家の一穂であった。つまり最も身近にいた同業の息子が、当時「自然主義の建て直し」を揚言し文学的活力を取り戻しつつあった秋聲に思想の血肉を与えたのだ。このことは、後述のように実際に一穂の作品を読み合わせることによって証明できるのである。

秋聲は自然主義・私小説の作家なので家族や身の回りの出来事を題材にするのは当然だが、先に述べたように、一穂の方もまた初期のモダニズム時代もそれ以降も周囲の実際の出来事や人物をモデルにして書くことが多い。そこから必然として起こることは、父子が同じ題材で描くという現象である。その際には自ずと作風の違いや人物・事件を見る視点の差異が生ずる。また、どちらの身に起きた出来事が題材になっているかによって傍観者／当事者が交替する。次節以降はこれまでほとんど言及されてこなかった一穂の作品群を概観するとともに、秋聲文学との様々な絡まり合いを検証してみたい。

3 『仮装人物』『順子もの』の周囲

一穂の小説第一作にあたる「人間生活の覚書」(1931年1月「新潮」)は、作家である父とその若い恋人である「森照子」、および少し年長の「マダム・キリ子」と呼ばれる「間門キリ子」との間に挟まれた主人公「僕」の苦悩を描いている。それぞれ秋聲、山田順子、柘植そよという『仮装人物』のモデル達にあたり、つまり本作は秋聲の「順子事件」を一穂の目から描いた作品ということになる。ただし実際には日本橋中洲で待合「新布袋」を経営していた柘植そよは「ホテル・マモン」を経営しているなど虚構化が図られており、また人物名からも分かる通り無国籍風な都市の群像を描いた作品となっている。母の没後に出来した父親と年若い照子の関係を知人から注意された「僕」は、「父の感情の中で、照子と自分を秤皿に載せ」ようとするが、父に嫌われることを恐れて強く意見することが出来ない。しかしそのような父との関係は「綻びやすい結目」で、何かの拍子に反目

し合うような「二人の神経」が問題になっている。秋聲「暑さに喘ぐ」（1926年9月「中央公論」）にも「この父と子は、ひどく親しくなることもあつたが、又ひどく不愉快な顔を為合つてゐることもあつた」と書かれている。なお、この「神経」とは初期の一穂文学のキーワードであり、後年の「出発はこれから」（1949年3月「東北文学」）では、当時の作品を横光利一や川端康成ら新感覚派の影響を受けた「詩味の勝った、神経の尖ったもの」であったと自己解説している。作中では秋聲「水ぎわの家」（1927年3月「中央公論」）や「仮装人物」でも描かれる一穂が洋行する友人を順子と見送りに行った話や、順子が一穂の友人の慶大生・井本威夫（本作中では「一川」と恋愛事件を起こして新聞に報じられ、一穂自身が順子の相手と間違えられたことなどが描かれている。また秋聲「金庫小話」（1934年1月「文芸」）でナチスの信奉者「クノオル」として描かれる柘植そよのパトロンのドイツ人（本作では「Von Richter」）との愛憎や彼女の奇矯な行動が、「手で硝子を割る女」というエピソードとして語られている。

その4年後に書かれた「花粉」（1935年3月「行動」）でも、自身が交際する節子（そよ）と父が交際する澄子（順子）との間に挟まれて、父親と双方の女性からの嫉妬に苦悩する様子が描かれるが、「ネクタイ」（1934年4月「新潮」）では山田順子は「水野照子」として登場し、秋聲「逃げた小鳥」（1926年7月「中央公論」）「元の枝へ」（1926年9月「改造」）で描かれる順子の失踪事件が回想される。その数年後に父子で照子母子と偶然再会したが「策さん（注・主人公の名）はちつとも変らない」と照子に言われ、自分がいつまでも一人前になれないことに思い悩む。この時期の一穂の作品には、父親にもしばしば指摘されたという自身の気弱な性格を卑下する視点と、既に成人して作家として活動しながら原稿料ではとても生活出来ず、結局は父親の庇護の下に生きている情けなさを自虐的・内省的に描いた作品が多い。

このように秋聲『仮装人物』の周辺で一穂もまた同じ事件を作品化したのであるが、山田順子については秋聲が「順子もの」と『仮装人物』

で描き尽くし、また一穂にとって順子は自分と二歳違いの父の恋人に過ぎないため、一穂から見られた出来事は『仮装人物』等で描かれたエピソードのディテールを明らかにするものではあるが、それ自体は大きな発見があるわけではない。これに対して、「人間生活の覚書」でキリ子として登場する柘植そよは、『仮装人物』の小夜子であり、また「水ぎわの家」「金庫小話」（いずれも前掲）「霧」（1934年9月「改造」）などのモデルであるが、それらにも描かれているように、一穂とも恋愛関係にあった。秋聲「曇つた頭」（1929年3月20日「サンデー毎日」）や、こちらでは若い友人と設定を変えているが「浪の音」（1929年5月「中央公論」）にも一穂と柘植そよの関係が描かれており、前者では一穂の生活問題に悩む秋聲の姿が描かれる。つまりこちらの件では一穂もまた当事者であり、秋聲が知り得なかった部分についても詳細に描かれているのである。そして一穂も自身の重要な文学的題材として認識していたようで、彼女との恋愛を繰り返し描いているのだ。もちろん小説である以上それらは事実そのままではないし、デフォルメや矛盾も散見されるのだが、ひとまずそよが登場する作品を今後の研究のためにまとめておきたい⁶⁾。

たとえば「帽子」（1933年6月「若草」）では、やはりホテル経営をしている「マダム・キリ子」としてそよは登場し、年上の恋人として、同時に実母を喪った主人公が「母のやう」な愛情を捧げる人物として存在している。作中には彼女に買ってもらった時計を身につけ、父親（秋聲）とその恋人の「おけいさん」と銀座に出かける場面も描かれる。「嫉妬の形見」（1933年9月「新潮」）でも彼女は「マダム・軽子」として登場し、やはり主人公が交際する若い「須磨子」と対比されながら、主人公が軽子の男性関係に苦しめられたことや、彼女のホテル経営が危なくなって他人に譲る結果となり、やがて「あなたと一緒にでは食べていけませんもの……」と言われて

6) この柘植そよについては野口富士男『徳田秋聲の文学』（1979年 筑摩書房）収録の「『仮装人物』の副女主人公」が最も詳細な先行研究であるが、以下の作品についてはほとんど言及されていない。

別離したことなどが描かれている。

これらの作品では「人間生活の覚書」と同様の詩的な文体で、虚実のはっきりしない書き方がなされているが、少し後の「花影」（1936年6月「文芸」）になるとより散文的になり、そよは「りゑ」として登場し、ダンサーの「由紀子」にも惹かれる主人公との間で中年期にさしかかった女性としての哀感を漂わせる。一穂の作品に描かれた柘植そよは、既に成人しながら父に寄生しているふがない自身を相対化する年上の経済力のある女性であり、同時にその不如意な時代の退廃的な恋愛を象徴する存在として描かれている。なお秋聲によって「F子（そよ）はK（一穂）の芸術に対する、尤も好い理解者」で「小説にしろ詩にしろKの書いたものとなると、目を皿にして貪り読ん」で「いつ迄たつても書かないこの若い芸術家のために机を浄めてインキや原稿紙を揃へるのも彼女であった」（「牡蠣雑炊と芋棒」1931年11月「文藝春秋」）と書かれるそよは、遊びではなく真摯に一穂を思い、作家として彼を大成させようとしていたことがうかがえるのだ。

また、「花影」の作中には秋聲「老苦」（1930年9月「文藝春秋」）などで描かれる、一穂の弟で十九歳で脊椎カリエスで帰らぬ人となった三作の死も描かれているが、一穂はくりかえし兄弟関係についても題材にしており、これも一穂の仕事の一角をなしている。「疵ある海—Poissons de la mélancolie」⁷⁾（1934年1月「行動」）で「S—」として度々回想される闘病の末に死んだ弟も三作にあたる。本作は、実家を出て房州で同棲しながら新聞の通信員をしている弟の「耕二」（襄二）との関係を描いており、秋聲「日は照らせども」（1928年4月「文藝春秋」）「青い風」（1929年10月「新潮」）などで描かれた、飲酒や金の持ち出しなど様々な問題を起こし、「決しかねる」（1926年1月「女性」）「別れ」（前掲）などで養子として母方の親戚に預けることすら検討された襄二のその後がわかるのである

7) 副題の「Poissons de la mélancolie」（憂鬱な魚）とはアポリネールの詩にプーランクが曲をつけた『動物詩集』の中の「鯉」に登場するフレーズで、クレール・クロワザが歌ったものからとった。

秋聲「暑さに喘ぐ」(前掲)には一穂と異なり襄二は「少しも父の傍へ寄つてこなかつた」とあり、「兄弟の性格はまるで違つてゐたが、兄弟なかはひどく好かつた」とある。この弟・襄二との交流は、後述の「北の旅」他、同じく彼が「耕二」として登場する『女の職業』(1939年4月 赤塚書房)収録の「兄弟」(初出不明)にも描かれており、同じく三作を題材にした作品は、義弟の「草場」(寺崎浩)の上海行きの見送りのために羽田行を決めたが、洋行が流れたために一人で死んだ弟との思い出がある同地に出かけてゆく「藤の咲く頃」(1941年6月「婦人画報」)もある。

4 書くこと／書かれることの葛藤

一穂の作品には、秋聲が山田順子との別離後に最晩年まで連れ添った女性、小石川白山で置屋を経営していた小林政子(『縮図』のモデル)の姿も現れている。「幕間」(1933年1月「新潮」)でダ・ヴィンチの描く女性像のような女として登場するのが政子で、主人公と同年の彼女と父の恋愛と、自身の踊り子「佐江子」への恋心が交互に語られてゆく。秋聲が政子との交際を認めるのが同年6月23日「東京日日新聞」の記事「若さは燃ゆる／秋聲老また結婚／白山の文学芸妓、富弥さんと／愛の試験期 同棲生活」であり、作品としては「町の踊り場」(1933年3月「経済往来」)で郷里の姉(次姉太田きん)の葬儀へ旅立つ主人公を駅へ見送りに来る「彼女」や「お蝶夫人」(1933年5月「あらくれ」)と一緒に観劇をする「K——子」としてちらりと登場させていたが、本格的に彼女をモデルにした短篇群「正子もの」^{しょうこ}を書き始めるのは同年10月の「死に親しむ」(「改造」)以降である。

本作中で主人公(一穂)は、「幕間ならいいけれど、もう舞台では何か芝居が始まつて、ひとびとは皆それぞれの座席について、それ相当に興味を覚えたり、興奮を感じたりしてゐるといふのに、僕だけはそんなほかのひとびととは何処か違つてゐたいと思つてゐるやうな、——丁度、ただ一人きりで開幕の時間であるのに、あんなものを見てゐるのは実にくだらな

いことのやうな顔付きをしながら（中略）劇場の廊下を歩いてみてゐるやうな感情だつた」との感慨を述べる。そして「僕の人生は今幕間なんだぞ！（緞帳の背後にはいつも神秘的な生活があるにきまつてゐる。）と心の底で叫んでゐるやうでもあるのだつた」と吐露されて作品は終わる。ここで興味深いのは、秋聲が1935年の『仮装人物』で用いた人生を舞台に見立てるというモチーフが先取りされていることである。本作では、人生という舞台から自分だけが阻害されているという視点であり、そこから父親の小説に「書かれてゐる僕と、ほんたうの僕との距離」に引き裂かれ「なにやら暗い影のやうなものがいつしか僕につきまといつて、——もう一つの僕の目がいつも僕を眺めてゐる臆病さが、僕の心に植ゑつけられてしまつてゐる」という実存的問題が引き出される。この「幕間」とは『仮装人物』にも登場する表現で（「インタアバル」とルビが振られている）、他にも「舞台」「仮装の登場人物」などとして過去の恋愛事件が表現されるのだ。

同年発表の「夜の庭」（1933年11月「行動」）は一穂が父の斡旋で「V—レコード会社」（ビクターであろう）へ就職面接に行った体験を元にしてゐるが、作中には「軽子」（そよ）と遊び仲間の「赤沼」、父親のダンス仲間でもある医師の「馬島さん」らが登場している。後二者は後述「年賀状」「遊び仲間」の関連人物であり、本作にも「人影も疎らな停車場からことごと動き出してゐる薄暗い客車の中でも、彼はどうしても今自分がこんなところに自分の意思とはまるつきりそぐはないやうな役割を演じてゐなければならぬのか分らないのだつた。でも何処へ行つても自分の演じるのにふさはしい役割はこの人生の芝居の中では書いておいてくれなかつたのらしい、そそつかしい作家を彼は自分の中に発見出来るやうな気がしてゐた」と、やはり「幕間」と同様に人生が舞台に喩えられている。

その少し後の「臆病神」（1937年10月「文学界」）では、芽の出ない作家である主人公が病に倒れた父親の全集を校正している。秋聲が『仮装人物』連載中に頸動脈中層炎で倒れて死線をさまよった時期の話で、全集は非凡閣版『秋聲全集』（1936年～1937年、全15巻）のことである。主人公の「利助」

は自分の全集であるにも関わらず仕事に全く乗り気でない父親に苛立ちながら、「生れた時から現在までの自分の姿が、如何に父親の小説の中で、水も洩らさないと云ひたくするくらゐまでに描き尽されてゐるかに、今更らながらに驚嘆し、言ひやうのない、複雑した感情」を感じ、「一刻も早く父の目から逃れなければ（中略）機関銃で乱射された人間のやうで、穴だらけだ、勿論仆れるのだ」と思う。本作では「人間生活の覚書」で描かれた山田順子と友人が恋愛関係に陥った事件があらためて回想されるが、やはり作家である父親に書かれ続けていることの恐怖と同時に、その父の死を非常に恐れているという錯綜した感情が描かれる。父秋聲に書かれることは自らの自己同一性を危うくすることであると同時に、他ならぬその父によってかろうじて自分の存在がつなぎ止められているということだ。このような分裂する自己の問題は同時代文学の描いたところでもあるが、一穂の場合はこのように直接「書かれる」経験が実存的問いとして育ち、作品として結晶化したのであろう。そしてそのような試みが、実際に作品を読んでいたかどうかは不明だが（おそらく読んでいないであろう）、父子が文学的知識と体験を共有し語り合うことで、『仮装人物』を描く秋聲にヒントを与えた可能性が高いのだ。

その意味でもう一つ象徴的な作品は「怠け者」（1935年5月「新潮」）である。本作では、父のところに入入りする「閨秀歌人の貝塚君子」から「藤蔭会」の際に紹介された年長の「船乗の未亡人」で「××女学校」の卒業生（間を取り持った「千池輝子」が同校の教員であったと）の「井出愛子」と主人公が静岡へ旅行に行き、同地に金持ちの姉のいる「菊枝」（柘植そよ）を回想する物語である。結局この女性とは一時交際したものの、主人公が「赤くなる」（左傾化する）ことを女性が心配したために上手くいかなかったとある。この年上の女性は「花結び」（1935年1月「新潮」）で「藤谷文子」（藤間静枝）のところで出会った「相当な船乗りかのお嬢さん」とされる人物と重なっており、ただしこちらでは友人の手引きで彼女に好意を伝えるが、あえなく失恋したことになっている。おそらく同一のモデルだろ

うが、どちらが事実に近いかは不明である。

本作「怠け者」では、その「愛子」との恋愛の思い出と並行して従兄の「五鬼由正」との関係とその死が語られている。「由正」は彼の姉の一家の「十年ほど前直腸癌で死んだ主人は続木の伯父（研の父の兄）と一緒にN男爵家の鉦山に長らく働いて」いて、また「近親結婚」をしたとあるので、「続木の伯父」は徳田家の主家・横山家が開いた尾小屋鉦山で所長として働いた秋聲の腹違いの兄・正田順太郎のことで、「主人」（由正の姉の夫）とは順太郎とともに鉦山に行き、その妹・きんの長女・雪と結婚した秋聲の長姉・しづの長男・小太郎であり、また「由正」は作中で主人公との年の差が十歳ほどとあるので、雪の弟の秀男（1890年生まれ、1934年没）がモデルと推定される。正田家に養子に行った兄・順太郎のことは秋聲「籠の小鳥」（1923年6月「新潮」）他で描かれているが、本作では封建的な忠臣意識に生きた順太郎が、主家の没落を救うために一族が所持していた「証文」を無価値な内容に書き換えてしまい、その結果姉の一家が困窮した話が書かれている。秋聲が郷里の親族を題材にした作品と同様に、複雑な人間関係と地方に生きる彼らの生涯に自身の体験を織り交ぜた好短篇である。

ともあれ本作が重要と思われるのは、「その正月の或雑誌に書いた小説の中に父が自家へつれて来て一緒に生活している若い女のひとのことを少しばかり書いたと云ふので、父は大へんそれに気を悪くしてしまひ、彼の書いたその小説を女のひとから何か云はれでもして一緒に読んだらしいその晩遅く二階の彼の部屋へやつて来て、その小説を糞味噌に貶した（後略）」とあることだ。この作品とは前掲「幕間」で「若い女のひと」は小林政子を指しているが、ここではまさに「書くこと」をめぐる闘争が起こっており、秋聲の側は一穂を書き続けてきたにもかかわらず、自分が書かれる側になるとそれを禁止しようとしたということだ。作家同士が互いを書くことをめぐる問題は既に秋聲「順子もの」の「和む」（1927年7月「中央公論」）にも登場しており、しかもその父が順子から「私のことは一切書かない」という「証書」を取られて書くことを禁止されたにもかかわらずそのこと

自体を含めて作品化したように、一穂もまた父の書くことに対する禁止の命令それ自体を作中に描き、なおかつその命令を無視してその後も書き続けたのである。ちなみに秋聲と順子についての同じ挿話は2ヶ月後に連載開始される『仮装人物』にも登場しており、さらにそれが「作家気質」という書くことの業として定義され直すことになる。ここにも秋聲と一穂の問題意識の共有が看取されるのだ。

そして比喩的に述べれば、その父との「書くこと」をめぐる闘争によって一穂は真に作家となることができ、以後は自分の文学的テーマを発見したと考えられるのだ。

5 都市・東京の裏面を描く文学

それが一穂の代表作というべき玉の井の女性を描いた連作である。一穂が私娼として働く女性を連れ出して自由廃業させたという、秋聲も「二つの現象」（1935年5月「婦人之友」）で描いているこの事件は、同年3月4日付「東京日日新聞」で報じられ、一穂はこれに対して「マニフェスト-救出事件に関連して」（1935年5月「行動」）を発表して弁明を行った。なお彼女は太宰治が通いつめていた芸者屋の同郷の女性でもあり、この事件に言及した檀一雄⁸⁾と浅見淵⁹⁾が「洋子事件」と呼んでいるので女性の源氏名は「洋子」だったと考えられ（一穂の作中では「曜子」とある）、本名は前述の記事では「村田せつ子」とある。太宰の方は一穂に遠慮して深い仲にならなかったとされているが、一穂は太宰のことを知ってか知らずか、父親の借金のせいで売られ苦海に身を沈められた女性に懇願されて彼女を救い出そうとしたのであった。

なお、この事件を描いた女性の作中名は「利枝」で統一されているので、

8) 「知られざる太宰治」『太宰治の魅力』1966年 大光社

9) 『昭和文壇側面史』1969年 講談社

仮に「利枝もの」と呼んでおくと、女性が抱え主から逃げ出した場面を彼女の視点から描いた「縛られた女」（1936年1月「新潮」）、一穂が女性の郷里・青森を訪れ、彼女が転々とした土地を辿って鱒ヶ沢まで足を伸ばした体験を描いた「鱒ヶ沢」（1937年1月「新潮」）、浅虫温泉で働く利枝を訪ねた彼女に「帰らないでここにゐなさい、あんた一人くらゐ、わたしが食べさせてあげるわよ」と言われながら結局帰ってきてしまう「急行券」（1939年1月「新潮」）が三部作になっている。さらにこの体験を主人公が女性の借金問題の解決に奔走する姿を描き、事件の全貌が最もよく把握できる「無心邂逅」（1939年8月「文芸」）があり、その後日談として北海道に渡って結婚¹⁰した弟（襄二）に会いに行く途中、青森の利枝の元に何度も通った体験を描いた「北の旅」（1942年3月「新創作」）もある。女性を連れ出した一穂がその後彼女としばらく暮らしたがうまくいかず、女性が郷里に戻っていったことも本作に書かれている。しかし「北の旅」に描かれているとおり、その後も彼女への思いは残り、結婚後も妻の反発を受けながら一穂は遙か青森まで会いに行っていたのである。この一連の作品は女性達の厳しい環境を描写する社会意識を有しているがゆえに、たとえば同じ地域を舞台にした永井荷風『溼東綺譚』（1937年 私家版）とはおのずと狙いが異なる。ゆえに特に「縛られた女」「無心邂逅」に描かれる玉の井の描写はリアリティがあり、野口富士男は『私のなかの東京』（1978年 文藝春秋）で同所を小説化した貴重な近代小説としてやはり荷風に触れた後に、川崎長太郎らと並べて「縛られた女」「鱒ヶ沢」を挙げている。

なお「北の旅」は「南方への時代に背を向けて」（「私の処女作と自信作」、1954年10月「出版ニュース」）あえて北を目指した作品と自作解説される中篇で、人間ドラマだけでなく戦時下の時代の空気がよく表現されており、一穂の生涯で最も力の入った作品と言ってよいであろう。一穂は作中で描かれる北海道行きの後にも秋聲とともに1942年に北海道に渡っており、この

10) 襄二は1941年に松橋リウと入籍し、長男を認知している。

時は体調を崩した秋聲を東京に返して一人樺太まで足を伸ばしている。

先にも述べたように、一穂の作品は「年賀状」(1934年4月「行動」)あたりから私小説・写実的な作品が中心になっていった。本作の「馬島老人」のモデルは秋聲の「死に親しむ」(1933年10月「改造」)で「渡瀬ドクトル」として登場する、同じ町内在住の宮城県出身で慶大医学部卒の亘理祐次郎医師(同年没)で、秋聲の社交ダンス仲間でもあり、秋聲の妻が脳溢血で倒れた際に呼ばれた医師でもあった。その馬島老人と友人として付き合い合っていた主人公(一穂)と、両者のダンサーとの恋愛の末路、そして老人の死までが描かれている。老人が主人公の好意を寄せるダンサー「佐江子」の家に深夜に酔って主人公とともに乗り付ける奇行を演じたり、主人公の父を激高させたりするエピソードは「死に親しむ」にも描かれているが、秋聲の描く飄々とした姿とはやや異なる、年甲斐もなく若い女性にうつつを抜かし夜の街で遊び回る生々しい姿で描かれている。

「遊び仲間」(1935年5月「文芸」)はその姉妹編で同じ「馬島老人」ともう一人のダンス仲間である商人の「赤沼」(モデルは事代堂義一か)も交えダンサー達と交流していた時代を振り返るとともに、死去した馬島老人の娘が「和泉橋」でダンサーになりたいと主人公の父(秋聲)を訪ねてくるまでが描かれている。和泉橋ダンスホールは日本社交ダンス界の第一人者である玉置真吉に秋聲と亘理医師がダンスを習っていたホールである(秋聲は同ホールの後援会長でもあった)。

この連作は、秋聲と同じ題材を扱ったというだけでなく、ダンスホールとそこで働くダンサー達の現実を描いた作品として価値がある。もっと言えば、一穂ほど、自身の体験をもとにしながらダンスホールで働く女性を作品化した作家も珍しい。たとえば「煙草の花」(1934年3月「あらくれ」)では「年賀状」の女性と同一人物と思われるダンサー「佐江子」が登場する。さらに「幻想の雪 室内楽風にした人生」(1931年9月「新潮」)でも抽象化されているが主人公が心を寄せるダンサー「貝子」が登場し、同じく「毛虫」(1934年2月「あらくれ」)でも、毛虫がシャツの裏側に張り付いて

いるようなけりの付かない恋の相手としてダンサーの「彼女」の存在が語られている。ちなみに「煙草の花」で「佐江子」の後に踊るようになったダンサーは「章子」として登場しており、「霧」（1934年9月「若草」）で主人公と友人とともに十国峠までドライブするダンサー「章子」と同一人物かも知れない。

「街の女」（1937年1月「芸芸懇話会」）はダンスホールを舞台に作家である友人の妻だった「桑島花子」を紹介される話であり、徳田家に切り抜きがあり初出誌不明の「詩集と踊り子」（「一九四〇・七」と書き込みあり）でもやはりダンスホールを舞台に、友人の詩集を出す話とダンサーとの恋愛模様の断片が描かれる。『北の旅』（1942年9月 桜井書店）収録の「帰らぬ昔」（「昭和16年1月」とあり初出誌不明）では貨物船の船長の家に生まれながら兄の学費を稼ぐためにダンスホールで働いていた女性「光枝」が、ダンサー達のたまり場だった「茶館おるごうる」を久しぶりに訪ねる姿が描かれている。本作は戦争に向かう時代の中で禁止されていたダンスホールを描いており、タイピストを目指して技術を取得したが元ダンサーであるために職を得ることができない女性の現実が焦点化される。

これらと問題意識につながりがあると思われる題材に「白い姉妹」（1938年1月「新潮」）「女の職業」（1939年2月「文学者」）の連作がある。この二作は本郷の帝大近くの「小便横町」の喫茶店で「喫茶ガール」をしている「マチ子」と「サン公」の姉妹をモデルにしたもので、姉に好意を寄せていた主人公だが、やがて二人は店から姿を消し、赤坂の芸者屋へと落ちていったことが語られる。再会したマチ子に借金の相談をされ、満洲行きも考えているという彼女の姿から主人公は「喫茶ガールが色気を売物にする女の職業の最初の階段であつた」ことを実感するのだ。なおこの「白い姉妹」連作は一穂が本郷の近隣の下宿に集う年下の学生達と交流が生まれたことをきっかけに、その戦時下のインテリ達の様子を描いた「麒麟館」（1938年5月「新潮」）と登場人物が共通しており、こちらの関連作でもある。本作では銀座の茶房で働く女性への失恋やマチ子姉妹との出会いも描かれて

いる。この下宿に集う学生達はやがて様々な事情で各地へ散ってゆき、多くの者が次々と召集されてゆく。その様子を描いたのが「いが栗頭」(1942年4月「文庫」)である。また『花影 徳田一穂短篇傑作集』(1940年7月人文書院)収録の「結婚」は、「取残された町」(1939年4月「文体」)と「モーニング」(1940年1月「新潮」)を合わせて再構成した作品で同じく「麒麟館」と連続性がある。一穂が1937年に結婚した池尻政子との結婚までを描いたものだが、保守的な「菊枝」(政子)と現代的な婦人記者の「道子」への思いに引き裂かれながら、結局は道子へも積極的になれず菊枝と結婚するまでが描かれる。このように一穂作品の登場人物達は複雑に絡み合っているのだが、その多くに充分働かずに実家に寄生している自己や鬱屈したインテリゲンチヤの若者たちに対置される形で、生計を維持するために厳しい環境で働かざるを得ない女性達が描かれているのだ。

ところで前述の一穂の玉の井事件を扱った秋聲「二つの現象」(前掲)は、一穂の方の事件だけでなく、小林政子(作中名「涼子」)の置屋に起こった抱えの娘の脱走も同時に描いている。ゆえに「二つ」の現象なのである。一穂の作品は世間知らずの若者が義侠心から女性を魔窟から救い出したものの、しかし簡単に悪所から抜け出せない女性の側の事情に気づいてゆくところに、そしてそのような女性を責任持って引き受けることのできない自身の弱い心を描くところに力点がある。対して没落士族の家に育った秋聲は親族の娘達が身売りされた様子を見ながら成長し、また自身も青年期から吉原に出入りしただけでなく小林政子との交際によって内と外からこの世界を長く見ているだけに、二つの出来事を善悪で切り捨てない視野の広い作品となっている。なお秋聲はこの時代に他にも「彼女達の身のうへ」(1935年1月「改造」)、「チビの魂」(1935年6月「改造」)、「のらもの」(1937年3月「中央公論」)など小林政子の周辺から取材した花柳界やカフェーで働く女性たちの現実を描いた短篇を集中的に発表している。これがのちに東京下町の靴職人から各地の花柳界を転々とする事になる小林政子の半生を描いた長篇『縮図』(1941年6月～9月「都新聞」連載)に結実することに

なるのである。つまり秋聲と一穂は、昭和10年代には父子で都市の片隅で苦しむ女性達を描いた小説を積極的に書いていたということである。

ここで興味深いのは、一穂がデビュー当時の詩的な文体を捨てて父親譲りのリアリズムへ向かうのと逆に、秋聲は『仮装人物』で一穂から受け継いだかのようにブルーストやジョイスに比類されるようなモダニズム文学を取り込んだ奇妙な私小説を成立させたことである。また現代事象を積極的に取り込んだ新聞や婦人雑誌の通俗小説も盛んに執筆していた。一穂「父と子」（一九三六・四「若草」）には親子で小説を書いている秋聲父子のような存在が描かれ、父親が息子に「××新聞で、長篇に職業婦人を書いて呉れと言ふので、今夜はおまえを呼んで何処か面白いマダムのゐる酒場へでも案内して貰はうと思つてゐたんだがね」と言う場面が登場する。秋聲が一穂とともに街に出かけ、カフェーやダンスホールなどに出入りする中で都市に生きる現代女性についての題材を得ていたということだ。そしてそれと平行しながら、秋聲は前述の社会の裏面を描く社会性の高い短篇群をこちらは元来のリアリズムを存分に發揮させて発表したのである。親子でありながら友人のような交流から秋聲と一穂は問題意識を共有し、それによって成立したのが晩年の秋聲の文学だったのである。その意味でも秋聲文学に対する一穂の役割はこれまで考えられてきた以上に大きいのだ。

6 戦後の中間小説と私小説

一穂の太平洋戦争中の作品については、前述の「北の旅」「いが栗頭」をはじめ真珠湾攻撃によりアメリカとの戦端が開かれた日の自身や父の様子を描いた「一つの峠」（1942年3月「新潮」）などいくつかの佳作があるが、以後大方の作家と同様に十分な活動ができなくなる。『軍人援護文藝作品集 第3輯』（軍事保護院、1943年）に収録された「湯の町」（初出1942年10月「新潮」）と「アカシヤの街」（同1942年10月「知性」）は1942年夏に軍事保護院施設を取材するために秋聲と妹の百子を連れて北海道に行った体験を描

いているが、厳しい検閲下でほとんど事実を羅列しただけの窮屈な記述である。そして父秋聲を1943年11月に喪った悲しみも癒えぬ中で帝都を米軍の空襲が襲い、一穂は妻と幼い娘二人を抱えて何度も防空壕に逃げ込み、帝大周辺が焼け残ったことで何とか生きのびることができた。

戦後になると堰を切ったように一穂は創作を再開するが、この時代に多く書かれた中間小説的な作品についてはほとんど知られていない。たとえば「風塵 K君への手紙」(1946年2月「新人」)は、戦時中に「××報国会」の事務として働いていた主人公がそこで出会った「K君」との思い出を、仏印で終戦を迎えた彼に向けて書き送った書簡体小説である。「××報国会」(文学報国会であろう)で見聞した検閲実務の実態(作家達の執筆可否のリスト化など)や、妻子のあったK君が慰問文を通して知り合った「中江兆民のお孫さんとか云ふお嬢さん」と親しくなり妻を離縁したことなどが語られる。戦争に翻弄されたインテリゲンチヤたちを描いた作品である。

「思ひ出」(1946年10月「交通クラブ」)は主人公が焼け跡で出版社勤めから生活のためにダンサーになる女性「草山浅子」とホールで踊る場面から、戦前に医師の「馬島老人」や亡父とともに和泉橋ホールにいたダンサー「佐江子」を回想し、戦争未亡人となった佐江子に向けて送られたやはり書簡体の形式になっている。主人公の職業は挿絵画家となっているが、当時の回想として「年賀状」の一節が度々引用されており、戦前のダンスホール華やかなりし時代と戦後に復活したダンスホールを対比しながら、戻らない時の流れとそこに挟まれた戦争の傷跡、そして国家体制は変われどダンサーとして生活戦線に立たねばならぬ女性達の姿を描いている。

「逃げた花嫁」(1948年2月「新風」)は主人公が戦後ふらりと入ったダンスホールで、かつて惚れていたが既婚者であることから諦めた「門倉妙子」と再会し、妙子が夫の戦死後に再びダンサーとして働き始めたことを知る。後日、郷里へ疎開していた母の葬儀に金沢へ行くことになり、同地の尾山劇場でレビュー団として公演を行っていた妙子と再会する。そこで彼女が一座の主宰の男から結婚を迫られていること知り、妙子を連れて逃げ出す

という物語である。本作も主人公は貴金属と時計を商っていた父親とそりが合わずに家を飛び出し、戦争で妻子を喪った挿絵画家となっているが、ところどころ一穂の経歴を思わせるように描かれており、妙子も「年賀状」や「思ひ出」の「佐江子」と重なっている。ただし書かれた内容自体はフィクションであろう。自身の過去の体験を活用しながら、戦後風俗を取り入れた現代小説の方向性を探っていたと考えられる。

「雨宿り」（1947年2月「農政評論」）もダンスホールが登場する作品だが、おそらく副主人公の小名木は当時一穂が交友のあった編集者時代の水上勉がモデルで、友人で主人公の杉野とともに水上の妻の叔父の封筒印刷工場を借りて出版社「虹書房」を興し雑誌「新文藝」を発行した山岸一夫がモデルと思われる。本作中では「虹書房」「新文藝」はそれぞれ「一色書房」「新文学」となっており、ただし小名木は空襲で妻子を亡くしているなど、必ずしも事実には忠実ではない。「一色書房」に勤める「桜山組子」が零細出版社の給料では生活できないことから、ダンスホールに出ようかと思っていることを杉野に相談するという前掲「思ひ出」と重なる物語だが、女性に同一のモデルがいた可能性はある。水上勉の当時の妻・松守敏子はダンサーとしてホールに出て、やがて知り合った男性と出奔するのだが、和田芳恵「水上勉 虹書房のころ」（「中日新聞」1968年2月16日）¹¹⁾によれば一穂は敏子のダンスホールに行き行って踊ったこともあるようなので、その話をヒントにしたのであろうか。いずれにせよ、戦後のダンスホールでの見聞を元に膨らませた作品であるだろう。

「紅の花」（1948年5月「日本小説」）はその和田芳恵が始めた中間小説雑誌（これによって和田は大きな負債を抱えることになる）に掲載された作品で、妻子持ちの作家の「狭山」が婦人記者で夫と別れた「春江」と知り合い、やがて春江の出るようになったダンスホールへ通うようになり、春江と熱

11) この文献は亀井麻美氏のTwitter (<https://twitter.com/kameiasami>) の2020年6月14日付の記述から教示を得た。

海へ旅行に出かける。狭山は家庭を壊す決心がつかず、のちに世話になっていた男と結婚したという手紙が春江から来たが、実はその男も妻があり妾として生きていくしかなくなった状況が語られる。このように一穂の戦後の中間小説的作品は互いに内容が似通っており、過去の体験を無理矢理膨らませた感が強く、当人としてもそこまで興が乗らなかったのではなかろうか。ただし、一穂が戦前と変わらずダンスホールとそこに働く女性を題材にしていたことには、その問題意識の継続が看取できる。

他方で一穂は、徳田家の墓がある谷中の臨江寺に福井から出てきた妹と墓参した体験と秋聲没後の戦争末期の空襲の回想が交錯する「墓参」(1946年6月「新文藝」)、妻・政子の親族の結婚を書いた「粉雪」(1946年7月「北の女性」)、妹・百子の結婚と夫の戦死とその後を描いた「未亡人」(1948年8月「明日」)およびその続篇「蝶子 続未亡人」(1948年11月「若草」)、さらに同じ題材を金沢の卯辰山に秋聲文学碑が建つまでと平行して描いた実名小説「碑と未亡人」(1954年11月「新潮」)などの私小説を書いている。これらの作品はしっかりとした描写力に、積み上げられた年齢と戦争という体験の重み加わり、いずれも力作であると言って良い。

中でも「粉雪」と「碑と未亡人」は出色で、前者は主人公が長野県の諏訪郡原村(秋聲の妻の実家近く)に疎開させていた荷物を引き取りにゆく車中で、山梨県の豊村(現南アルプス市)で医学を学んでいる姪の万里子を回想する物語である。本作が貴重なのは、一穂が1937年に檜崎勉の妻の紹介で見合い結婚した池尻政子(広島出身)の姉の長女である渡辺満里子が、最初の特攻隊として戦死した関行男大尉に嫁いだ出来事を描いたものであるからだ。この事実は野口富士男が断片的に記していたが、これまで具体的には知られておらず、後年の一穂も語ることがなかったのである。作中に登場する関夫妻が一穂を訪問した日のことは関の戦死後に発表された一穂の随筆「関大尉の印象」(1944年10月「文学報国」)にも書かれているが、「青年将校との間にかわされる「戦争のことは軍人にまかせておいて下さい」「文学のことは文学者にまかせておいて下さい」との緊迫した対話が印象

のである。これは満洲事変の翌年の体験を描いた秋聲「町の踊り場」（前掲）での兄（順太郎）の養嗣子である軍人との対話「戦争はありますか」「ありませんとも」を想起させる。短い作品だが、親族をモデルに将来豊かな若者たちが命を散らした愚かな戦争を抑えた筆致で描き、父親と同じリアリズムの道を深めていった一穂文学の一つの到達点と言うべきである。

「碑と未亡人」は前述のように妹の百子が福井出身で帝大卒の猪口富士男¹²⁾に嫁ぎ、その猪口の戦死と金沢における文学碑建立の経緯を交互に語る形式になっている。1948年に卯辰山の望湖台に建てられた「徳田秋聲文学碑」は金沢出身の建築家・谷口吉郎設計によるもので、この建碑は実務を担った加藤勝代（北國毎日新聞）と宮川靖（金沢市文化課）をはじめ、谷口を紹介した野田宇太郎や川端康成や林芙美子など多くの文壇人が協力した一大顕彰運動であった。この秋聲碑が「文学碑」という名称を始めて用いたという意味で「日本で最初の文学碑」となったことも知られている。本作のクライマックスとなるのはその碑文の揮毫を谷崎潤一郎に直訴するために熱海の別荘を訪ねる場面であるが、父・秋聲が語った谷崎の「眼」と一穂は対峙し、そこには秋聲の畏友・亡き泉鏡花の影があるという趣向である。

そして第2節で述べた通り、この「碑と未亡人」が判明している限り一穂の最後の小説となった。戦後は中村光夫の言う「風俗小説」にも果敢に挑戦し、そこには戦前から戦後にかけてのダンスホール通いの体験が生かされたが、作品の掲載誌からも分かるとおおり一穂が小説家として文壇の中心に戻ることはなかった。父から遺された住居の隣に戦後木工場が建ち、酷い騒音を発する工場との闘いに労力を割かれた事情もあったようだが、やはり戦後文学の波に乗れなかったというのが実情であろう。また、父の死によって「書き合う」緊張感が薄れた点も大きいのではないか。地道に

12) 太宰治と檀一雄と伊馬春部を中心に1937年に結成された遊誼団体「青春五月党」の一員で、前述の「麒麟館」にも少し登場している。

私小説の道を究めてゆけば、もしかすると秋聲文学を引き継いだ野口富士男や和田芳恵のように遅咲きでも評価される時代が来たのかも知れないが、以後の一穂は父・秋聲の功績を後世に継承することや各種の随筆の方で力を発揮することに決めたのだ。とはいえ、ここまで早足で見てきたように、生涯にわたってこれだけダンスホールを中心に都市文化とその裏面を題材にし続けた作家は稀少であり、その風俗史的価値や玉の井物なども合わせて下層の職業婦人の現実を体験的に描いた存在であったことは記憶されるべきである。今後、一穂の文学が再評価されるとすればこの視点からになるのではないか。

7 おわりに

これで徳田一穂の全ての作品に言及し得たわけではないが、本稿ではひとまず一穂の創作の全体像を概観しその特徴を明らかにすることに努めた。偉大な父・秋聲の蔭に隠れてこそいるが、一時期は文壇で一定の活躍をしたことを示し、また秋聲文学との直接的・間接的な影響関係も整理することができたと考える。限られた紙幅のため、両者の作品の詳細な比較や、そこから明らかになるであろう諸問題については今後の課題としたい。まずは徳田一穂が秋聲に「書かれる」だけの存在でなく「書く」存在でもあったことの証明が本論の第一の目的であり、本稿をきっかけに徳田一穂の文業が様々な形で参照されるようになることを願っている。

附記：本研究は科学研究費「〈私小説性〉の計量的分析と国際比較による〈自己語り〉文学の発展的研究」（課題番号：20K00347）の成果である。

（東海大学文学部教授）